
村研三〇年の歩みのなかで

君塚正義

まず村研三〇周年に当り感懐の一端を述べさせていただくことに
対し感謝いたします。私はおそらく昭和三〇年頃の入会ですから古

手の方かと思いますが、昨年秋の日光大会で柿崎会員の補佐役の一人として事務局の裏方をさせていただいた程度で、余り真面目な会員でなかったことを反省しています。

いうまでもないことですが、村研のユニークなところは、第一に各種の委員会制で運営し、会長や副会長を設けないことでしょう。従って大家の先生もヒラの私共でも自由に討議に参加できる。第二に大会は泊り込みのため深夜まで活発な交流のできることに。第三に全国各地で開催して見聞がひろめられることなど大変たのしい研究会です。このように民主的で開放的な研究会は他の学会にはみられず、さすがに社会学者の組織であると敬服しています。またこのような伝統を築きあげてこられた先学の方々と、それを受けつぎ発展させた会員各位に改めて敬意を表します。

さて先学といえはまず有賀先生や野尻先生などを想い起さずにはいられません。たしか蒲郡大会（昭和三五年）が私の最初の研究会出席だったように思います。蒲郡荘の会場は椅子式でなく、座敷で胡座をかいて報告を聞いたように覚えています。当時まだ駈出しの僕は隅の方で拝聴したのですが、白髪で柔和な有賀先生の端整なお姿が今でも眼にやきついています。

その後勤務先が盛岡（東北農試）に移ったこともあって、しばらく研究会から遠のき、天童と遠刈田の大会に参加した程度です。遠刈田では東北グループの方々と深夜までべりかつ飲み村研の味を堪能させていただきました。昭和四九年から再び東京（農技研）に戻ったため、時折学士会館や中央大学などの在京の小集会に顔をだ

し、研究動向にも直接ふれる機会が多くなりました。

それから金沢（辰口町）・津和野・柳川の大会にも参加させていただきました。比較的関東や東北にかたよっている私にとって、日本の風物は新鮮そのものでした。大会の内容や印象は、村研通信や研究年報にゆずり、ここではふれませんが、農村社会の「崩壊」や生活の「破壊」が進行するなかで、大会は年々盛会になり、報告も討議も深まってきたように思われます。また夜の交流も一層活発となり、若手研究者も加わって村研の輪が年ごとに拡がってきました。金沢では帰途周辺の農村をたづね、津和野では名所めぐりをし、柳川では塚本会員や農水省の研究グループと舟下りを楽しんだことも楽しい思い出の一つです。

また奈良大会も是非参加したくて予約しながら所用で欠席し、後藤会員など地元事務局に御迷惑をおかけしました。日光大会をお手伝いして事務局の苦勞を実感した次第です。今年も研究会でも夜の部でも最も力量のある東北で開催するといっているので今から楽しみにしています。古くから「農学栄えて農業減ふ」といわれてきましたが、「村研栄えて農村減ふ」ようになっては困ります。事実そのために三〇年間管々として農村の実態に即した理論的・批判的研究をつみ重ねてきたのが村研です。かつて鈴木栄太郎が「農村社会学原理」で述べているように「農民の生活原理を度外視した農村対策は所詮偏頗であり、姑息である」と。私達は三〇周年という節目に立って、あらためて鈴木栄太郎を始め先学の研究に対するガイストと情熱と実践性に学ばなければならないと痛感している次第です。村研の一層の発展と会員諸賢の御自愛と御精進を期待いたします。